

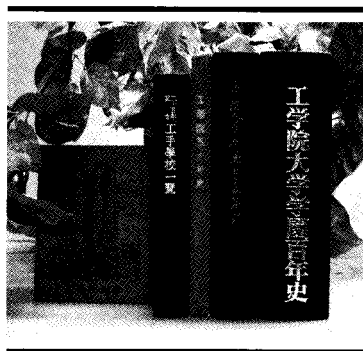
## 学園百二十五年史発刊にあたって

これまで学園は、四半世紀を節目として歴史をあとに引き継ぐための周年史を刊行してきた。創立125周年を迎えるにあたり、4年余にわたる準備を重ねて、ここに5冊目の周年史を発行するに至った。創立100年、すなわち昭和62（1987）年までの歴史については百年史に詳しく述べられている。百二十五年史でも、直近の四半世紀の記述に重点を置きながらも、創立以来の全歴史が描き出せるよう編集を進めた。なお、年史を気軽に手に取れる厚みに抑えるため、読み物風の本編と、資料編に分けて刊行することにした。

これまで刊行された25周年、50周年、75周年、100周年の4冊の周年記念史を読み返すと、学園を突き動かしてきたそれぞれの時代の運命的背景に強い感慨を覚える。まずそれらを振り返ってみよう。

### 25周年 大正2（1913）年発行の『二十五年記念工手学校一覽』

明治から大正に変わる年に25周年を迎えた。無から立ち上げ、火災による打撃を乗り越えて工手学校を軌道に乗せた経緯が生々しく語られている。卒業生



顧問・前理事長  
大橋 秀雄

の厚みも増し、教員も充実し、明治の国造りに貢献した自負とともに周年を祝った。

## 50周年 昭和19（1944）年に刊行された『工学院五十年史』

7年遅れで記念史が発行されたこと、茶色く変色した紙質から、苦難の時代が色濃く浮かび上がる。第一次世界大戦、関東大震災、新宿での再建と工学院への改名、そして50周年と時を合わせて始まった日中戦争。学園をめぐめる環境が目まぐるしく変化するなか、新宿の地に逞しく根をおろした四半世紀だった。

## 75周年 昭和39（1964）年発刊の『工学院大学学園七十五年史』

1年半遅れで発行された500頁に及ぶ大作。昭和20（1945）年に迎えた敗戦、昭和24（1949）年の大学設置、機械、工業化学から始まり、電気、建築、生産機械、電子を加えて6学科体制を整備、八王子キャンパス開学目前と、どん底から飛躍へと波瀾に満ちた四半世紀だった。重厚長大を先頭に日本の産業が奇跡の復興を遂げた時期とも一致する。

## 100周年 平成5（1993）年刊行の『工学院大学学園百年史』

1、000頁を超す超大作であるが、編集上の事情から発行は6年後となった。激しく燃え上がった大学紛争、オイルショックの洗礼などを受けながらも、大学も産業も順調な発展を続け、Japan as No.1ともてはやされるに至った時代だった。100周年の翌年から新宿の再開発工事が始まった。その後訪れるバブル経済の崩壊と経済の低迷からみても、100周年の契機が新宿再開発の決断を促したとすれば、天の恵みを感じる。この百年史は、工手学校時代を含めて、新宿校舎が近代ビルに生まれ変わるまでの歴史を余すところなく伝えている。

学園の歴史は、不易と流行の四文字に凝縮される。不易とは建学の精神を守り抜くことであり、流行とは、時代の変化に賢く、かつ素早く対応することである。昭和62（1987）年から平成24（2012）年までの第五の四半世紀にわたり、われわれに対応を促し続けてきた変化の核心は何だったのか。それを正しく見極めるには時が必

要であるが、いまその時代を終えるにあたり、学園の経営に最も大きな影響を与えたと思われる環境の変化を、三つに絞って挙げてみよう。

**若年人口の減少** わが国の出生数は、昭和23（1948）年前後に団塊の世代と呼ばれる大きなピークを、昭和48（1973）年前後にその子どもにあたる第二のピークを迎え、その後一貫して減少を続けている。大学進学の高年齢人口に着目すると、第二次ベビーブームの世代が平成4（1992）年に206万人のピークに達したのを最後に急激な減少に転じ、10年後に150万人、20年後の平成24（2012）年には119万人（ピーク時の58%）まで減少した。わずか20年で18歳人口が半数近くまで減少する歴史上例を見ない大変動、加えて工学離れの逆風が吹く中で、どう対応して学園の存続と発展を図っていくか。これが、この四半世紀の最大の課題となった。なお中学、高校については、その変動が数年さかのほるだけで、問題は同根である。

**大学設置基準の大綱化** 規制緩和の一環として、平成3（1991）年に文部省は大学設置基準の大綱化を行った。それまで、校地・建物面積から教員数・教育内容に至るまで細かく基準が定められていたが、多くの基準が撤廃されて教育に対する大学の裁量が大幅に拡大された。その代償として、教育改善のための自己点検・自己評価が義務付けられ、義務化された認証評価やJABEE認定など、第三者評価の時代の幕開けとなった。大学や学部の新設・改組に対する規制が大幅に緩和された結果、当然のように大学新設や改組のラッシュが始まった。平成4（1992）年に18歳人口の減少が始まって以来の20年間に、大学数は公立、私立を中心に大幅に増え続け、とくに私立大学は384校から599校へ56%も増加した。学部の改組・新設はこれを上回るものがある。設置基準の大綱化は、18歳人口の激減と絡み合いながら、大学全入時代を招来するなど大学をめぐる様相を一変させた。

**情報化とグローバル化** 情報通信技術（ICT）の急速な普及と浸透の結果、プライベートからビジネスまで、インターネットが情報交換の主役に座り、ICTなしには動かない社会に大変貌を遂げた。あわせて、情報が国境を越えて瞬時に全世界に広がるようになり、常にグローバルなつながりを意識する時代となった。その二つの動

きが、この四半世紀の変化をリードしたと言ってもいいだろう。この間、学園においても学生や教職員間の連絡や外部への広報がインターネット中心となり、教育・研究や業務を支えるツールとしてICT機器の導入が急速に進んだ。これらの機器の陳腐化は早い。情報マネジメントが経営の重要な柱に浮上した。

この四半世紀の中で、私は、学長9年、理事長8年、合計17年間にわたり、学園経営に重要な責任を担う巡り合わせとなった。学長に就任した翌年の平成7（1995）年に、新宿校地の再開発がすべて完了し、副都心の高層ビルに拠点を置く異彩を放つ大学に生まれ変わった。すでに引かれた路線に乗って計画が進行し、工事の途中で起こったバブル経済の崩壊は、工事費の点でむしろプラスに働いた。まさに絶妙のタイミングで工事が完了し、その後、の嵐に立ち向かううえで、最上の贈り物を授かったことになる。深い感謝の思いを、学園の先達たちすべてに捧げたい。深刻な事態は、若年人口の減少と規制緩和の影響、それに工学離れが重なり、大学志願者の減少、専門学校および大学第2部の大幅な定員割れとして顕在化した。大学の受験者総数は平成9（1997）年以降急速に減少を始め、その翌年から帰属収入も減少に転じた。事態への対応が待たなくなってきたのである。平成8（1996）年から5カ年計画「ジャンプ21」はすでに始まっていたが、それに続く平成13（2001）年からの「スタート21」、平成18（2006）年からの「ダッシュ21」を通じて、学生・生徒の適正数を維持して経営の健全性を確保する目標に努力を結集した。その努力が徐々に実って、平成19（2007）年から帰属収入は増加に転じ、大学受験者数も増加が続くようになった。当面の逆風を撥ね返し、上り坂の気運の中で125周年を迎えられることは、ともに力を合わせた関係者とともに喜びを分かち合いたい思いでいっぱいである。

この間にとった対応のなかで、最も心が痛むことは、工手学校以来の伝統を引き継ぐ工学院大学専門学校を廃校に導いたことである。少子化の嵐の中で選択と集中を断行し、大学を核に体制を強化して学園の基盤を固めるための苦渋の決断だった。そのほか主要な対応を挙げると、グローバル化が進む中で世界に通用する技術者を育てるた

め、J A B E E 認定とグローバルエンジニアリング学部の新設を実現したこと。情報化社会への対応として情報学部を新設したこと。伝統を誇る建築教育をわが国初の建築学部として躍進させたこと。いずれも教育の魅力を一層際立たせるためだった。校友と学園を車の両輪にたどって協力を強化すること、これまた逆風の中で学園の総力を結集する方策でもあった。小中高生に科学の面白さを伝えるための理科教室の開催、全国の高校生を対象とする理科・科学クラブ研究論文の募集は、若い世代の関心を理工学、ひいては本学へ惹きつける意図で実行された。広く社会人を対象とする生涯学習事業の展開は、教育サービスの顧客を拡大する試みでもあった。以上は大学を念頭に対応を述べたが、中学、高校も問題はさらに厳しかった。平成8（1996）年には、昭和33（1958）年以降募集を停止してきた中学校を再開し、中高一貫体制を整えて生徒層の拡大を図った。その後は、平成14（2002）年からの男女共学への転換、中高連携のもと多様なコースを提供して進学魅力を高めるなど、絶え間ない改善を実行した。

伝統ある学園に身を置くと、学園という不動の存在があつて、時間に長短はあつても、学生や教職員がそこに人生の一時期を託して通り過ぎていく、実体は学園であり、学生教職員は過客に過ぎない、という錯覚にとらわれることがある。しかしよく考えると、不動の学園など存在しない。

人は一生をかけて、時の流れに一筋の線を描いて去っていく……。いま学園に集う500名の教職員と8、000名の生徒・学生諸君が描いている線が、学園の名のもとに太く力強い柱となつて結束し、未来に向かって延びている。その柱こそが、確かな存在としての学園の実体である。あとを振り返ると、その柱は人替わり代を重ねて、125年前の創学まで延々と延びている。過去の人たちが残した歴史の上に現在があり、いまの人たちが創り出す未来が、やがて歴史に変わっていく。125年に続く次の四半世紀、変化の嵐はますます激しくなっていくだろう。学園をしなやかに逞しく生生発展させる力は、伝統を引き継ぎ、いま働き、いま学ぶ人たちが担っている。